

廳事類編

●定価(下巻) A5判上下全二巻(上巻既刊)

既刊の「永保記事略」「廳事類編上、下巻」は、次に刊行を予定している「宗国史・増補改訂版全三冊」と共に、上野市古文

献刊行会が企画する二部作である。

永保記事略、廳事類編は、藤堂采女家(本姓保田)が伊賀城代家老職に補任なつた寛永十七年から慶應四年までの、藤堂藩政史料である。それは伊賀、伊勢に存有した各種の記録、即ち、行事帳、一件帳、獨書帳、覚書帳などの古簿をもとにして、日録体式に整理編纂されたものである。下巻では、それらの古簿の体裁を知つて戴くため、一件帳に属する記録、即ち慶應元年十二月十六日の慈光院(采女元晋の妻)の死去の記録その他を附篇として戴せた。この記録から推察すると、古簿の全体は膨大な量であつたであろうが、今日では殆んど散逸して見る由もない。

さてこのたび刊行する廳事類篇下巻の見るべきものを、一、二あげると、藩学校崇広堂(シユウコウドウ)の創建や安政元年の大地震などがある。崇広堂は文武の學習修練の場であつたが、時には藩の政務場の一つにもなつた。然も、ここに入学する子弟は高録者に限らず、陪臣に至る下級武士が続々と入学を許された。この下級武士の台頭、引いては下級武士の縁辺の在郷無足人、町人などの記事の多いのも、廳事類編下巻の特色といえる。

又、当時の時節柄、安政の大地震も興味をそゝられる。所謂の安政大地震は、安政二年十月二日の諸国の大震を指すが、それより約一年半程前に伊賀を中心へ勃発した嘉永七年六月の地震を、伊賀では普通に安政の大地震と称している。この間の引きつづく地震の史料なども見落せないものである。その他、本書は武士の出所進退、風習、刑法等、各般にわたつて幕末期・維新前の大名家の内側を窺うに足る史料集である。三重・奈良県の郷土史家はもとより、藩政史研究者の好個の資料である。なお、引続いて、「宗国史」の増補改訂(全三冊)も進捗しているので、併せて活用されれば望蜀の幸である。

廳事類編の 完結に際して

上野市長

奥瀬平七郎

上野市立図書館の大事業の一つとして、上野市立図書館所属の古文献を、上野市古文献刊行会の厳密な校訂を経て、印刷發行することを定めたのは、昭和四十九年のことである。

その第一回事業として、昭和四十九年「永保記事略」が、また第二回(五十一年)は「廳事類編上巻」が出版されたことは、周知のことであるが、全国名地の歴史愛好者ならびに識者から、多大の讃辞をいただき、今更ながら、私達もこの事業の意義の重大さを痛感した次第である。

「廳事類編」は、「永保記事略」以降の藩政の記録であり、宝永六年から慶應四年に至る、藤堂藩政下のあらゆる事象の記録であり、伊賀ならびに上野市の歴史にとって、かけがえのない重要な文献の一つである。何分にも膨大なものなので、上・下二巻にわかつ、五十年度には上巻が、今回下巻が発刊されることになった。この原本は昭和初期まで藤堂采女家に所蔵されていたが、上野市在住の郷土史家、故、菊山当年男氏が縁あつて所蔵され、当年男氏没後、上野市図書館に寄贈されたものである。因みに故、菊山当年男氏は、郷土史研究家であるとともに、特に芭蕉翁の研究家として知られるほか、古伊賀復元を志す陶芸家としても有名であり、またアララギ派の歌人としても頭角をあらわす等多才の人であった。

ともあれ、校訂陣の言語に絶する労苦の末に活字本「廳事類編」は出現したのである。この際、上野市古文献刊行会の会員の方々の御努力に対し、心から感謝申し上げるとともに、引き続いでの御精進を重ねて御願いするものである。

昭和五十二年四月一日